



世界の農業・農政

中国の小麦需給の動向

国際領域 上席主任研究官 河原昌一郎

はじめに

中国は世界最大の小麦生産国ですが、消費量も大きいので、かつてから小麦生産は不足傾向にありましたが、生産量が1億トンを超えるようになった1990年代後半以降は、輸入が減少し、逆に小麦が輸出される年も見られるようになっていました。ところが、最近になって、再び小麦が大量に輸入されるようになってきています。

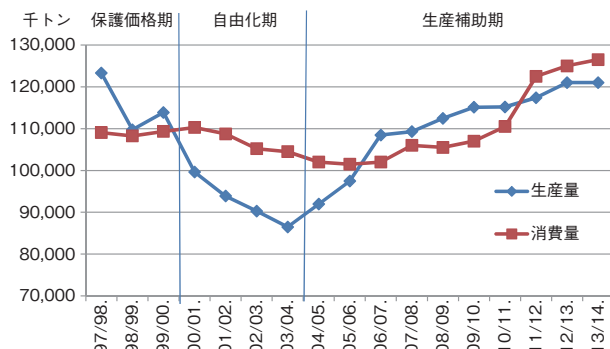
このように、中国の小麦需給は、中国におけるもう一つの主食であるコメと比較すると、比較的不安定です。それでは、近年のこの小麦需給の動きはどのような構造または要因によって形成されているのでしょうか。

本稿では、このような問題意識のもとに、まず中国小麦の生産、消費の動向を概観した上で、中国小麦の消費構成の変化を検討し、そのことを明らかにします。その上で、中国の小麦生産の収支状況等も示しつつ、今後の見通しについて述べることにします。

1. 中国小麦の生産・消費の動向

中国小麦の生産量および消費量の推移は、第1図のとおりです。

同図のとおり、1990年代後半以降、生産量が消費量を上回る時期と、逆に消費量が生産量を上回る時期とが交互に現れるようになってきています。



第1図 中国小麦の生産量および消費量の推移

資料：Foreign Agricultural Service, Official USDA Estimates.

まず生産量の動きから見ていきましょう。1990年代は、余剰小麦を政府が保護価格で原則としてすべて買い上げる政策をとっていたため、小麦生産が過剰となり、在庫が積み増しされる状況となっていました（保護価格期）。2000年からは、保護価格期における財政負担の増大、WTO加盟による自由化等に対処するため、保護価格制度が段階的に廃止され、小麦の価格、流通に関する自由化政策が実施されました（自由化期）。この自由化政策によって、この時期には、小麦価格が下落し、農家の小麦生産意欲が減退して生産量が大きく減少しました。自由化期の生産量の著しい減少、これにともなう輸入の拡大という事態に危機感を持った中国政府は、2004年から、農家への生産補助金交付を主たる手段として小麦の生産振興、拡大を強力に進めるようになりました（生産補助期）。生産補助期においては、生産補助金の額が毎年大きく増額されたこともあって、生産量は増加を続け、近年では生産量が1億2千万トンを超えるようになってきています。

一方、消費量は1990年代を通じてほぼ横ばいの状況にありましたが、2000年代になると消費量が明らかに減少するようになります。これは、消費生活の多様化によって1990年代から減少していた1人当たり小麦消費量がWTO加盟等によってさらに大きく減少するようになったためです。そして、2000年代半ば頃までこうした傾向が続きます。

ところが、2000年代後半には再び全体としての消費量が増加するようになり、特に2010/11年から2011/12年にかけての増加は大きく、このため、近年では再び消費量が生産量を上回る状況が続くようになってきています。

それでは、なぜこの時期に小麦消費量が増加したのでしょうか。このことについては、小麦の消費構成の変化を見ることによって検討することとします。

2. 中国小麦の消費構成の変化

中国小麦は、製粉用のほか、飼料、工業原料（デンプン、グルテン、工業用アルコール等）その他の用途に用いられており、第2図はこれらの用途への

消費構成の変化を示したものです。

同図のとおり、中国小麦の主たる用途は製粉ですが、近年では飼料および工業原料用の消費比率が増加しています。すなわち、2000年代後半からの小麦消費量の伸びは、この飼料および工業原料用の消費の伸びによるものですが、とりわけ、飼料用消費の伸びが著しくなっています。

こうした小麦の飼料用消費の拡大の背景には、言うまでもなく、肉類生産量増加に伴う飼料需要の急速な増大があります。中国の肉類生産量は一貫して増加を続けており、これとともに中国の飼料生産量は1991年の3,583万トンが、2010年には1億6,202万トンと20年間で約5倍に増加しました（中国飼料工業年鑑）。こうした飼料生産量の増加が、トウモロコシを中心とした飼料用穀物需要を大きく増大させ、近年の飼料需給の逼迫の中で、小麦も飼料として用いられるようになったのです。

なお、第2図で、2011/12年の小麦の飼料用消費が特に大きくなっているのは、この年には小麦価格のほうがトウモロコシ価格よりも安いという状況が

あったためです。

おわりに

第1表は、中国小麦の1ムー当たりの主要な生産指標を示したものです。

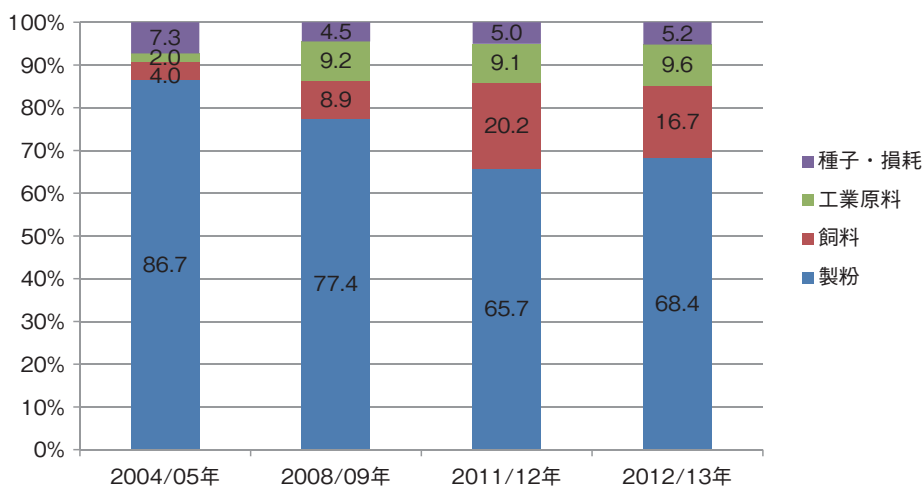
中国小麦の単位収量は、2008年までは増加が見られますが、その後は伸び悩んでいます。このことは、作付面積の増加がなければ、小麦の今後の増産は困難となっていることを示すものです。

一方で、中国小麦生産の総費用は毎年大きく増加しています。総費用の約半分を占めるものが材料・サービス費ですが、材料・サービス費は、生産資材の投入量の増加、物財費の高騰とともに増大しており、下方硬直的です。現在は、小麦価格が上昇することによって何とか純収入は維持されていますが、もし小麦価格が下落するようなことがあれば小麦生産は直ちに赤字に陥り、生産量は減少するでしょう。

中国政府は、2004年以降の生産補助期において、農家に生産補助金を支出することによって作付意欲

を刺激し、最低買付価格制度による価格支持を行うことによって小麦生産の収益性を維持してきました。しかしながら、補助金支出等による財政負担はすでに相当大きなものとなっており、これらの手法にも限界があります。

今後、小麦の価格動向、飼料の需給動向等によっては、小麦需給の均衡が崩れ、輸入が大きく増加する事態も十分に想定されるようになっているのです。



第2図 中国小麦の国内消費構成の変化

資料：中国食糧発展報告，中国備蓄食糧管理総公司。

注：図中の数字は構成比（％）。

第1表 中国小麦の生産指標（1ムー当たり）

	2004年	2006年	2008年	2009年	2010年	2011年
生産量（kg）	339.8	351.8	388.3	378.1	370.0	389.2
生産高（元）	525.5	522.5	663.1	717.5	750.8	830.2
総費用（元）	355.9	404.8	498.6	567.0	618.6	712.3
うち材料・サービス費（元）	200.3	230.6	278.7	317.5	318.4	357.3
労働費（元）	111.8	119.6	133.2	145.6	178.8	225.7
総収入（元）	169.6	117.7	164.5	150.5	132.2	117.9

資料：全国農産品成本収益資料匯編各年。

注：「機械等作業費」は、機械作業費、排水灌漑費、畜力費の合計